学院福音化2022年10月

１０月の序論のポイント５つ

１．聖餐式

イエス・キリストの十字架の恵みによる救いに対する確信と感謝

２．集 中

私たちの霊的状態が変わった。　死　→　いのち　＝再創造

３．特別祈り

神様の絶対計画、エジプトや荒野のような今のところに

４．定刻祈り

たましいは、みことば祈りによって生きる（いやし）

５．まことの答え

御座の力、時空を超越した神の国の祝福をこの世でも味わう

第５課　イエス様の仕上げの教え（マタイ 22:1-14）

今日のメッセージに入る前に、まず、確認してほしいことがあります。

聖書はただイエス・キリストに関する神様のみことばであることを覚えてください。
聖書は、私たちに道徳的、倫理的、人生の知識を教えているのではありません。
どのようにしたら、神様のために、もっとたくさんのことができるのかという、
宗教的な熱心さを要求しているものでもありません。
聖書のどこを見ても、ただイエス・キリストと、その方の恵みだけを見なければなりません。
絶対不可能である罪人である人間が、絶対可能な神様の愛となぐさめとあわれみによって、救いを得たのです。
その神様からの救いの恵みは、神様の熱心さによって与えられるのであって、人間側のどんな熱心さや努力も、
0.1%も入っていないことを知らなければなりません。

きょうの内容も、「福音なのか 宗教なのか」「恵みなのか 行いなのか」についての内容です。

フォーラムのポイント　「私はどこに属する者なのか？」

1　結婚の披露宴のたとえ（マタイ 22:1-14、ルカ 14:15-24）

マタイ 22:1-14 に結婚の披露宴のたとえが出て来ます。
このたとえは、なにについてなのか、イエス様が明らかに語られます。

マタイ 22:1-2

1 イエスはもう一度たとえをもって彼らに話された。
2 「天の御国は、王子のために結婚の披露宴を設けた王にたとえることができます。

神の国についてのたとえです。この天の御国のたとえは、黙示録に記録されているのと同じ、この地はイエス様の結婚の披露宴で終わりになり、新しい天と新しい地になることに関してのたとえです。ですから、王子のための結婚の披露宴と言われています。

簡単に内容を説明します。

ある王が、自分の子どもである王子の結婚の披露宴を開くことにしました。
まだ、いつするか決めていないときに、
「これから披露宴をするので、そこに来てください」と、
あらかじめ定めた人を招待していました。
いよいよ「時が来たので、来てください」と、招待していた人たちに、しもべを遣わして伝えました。
ところが、招待されていた人たちは、それぞれ自分たちの理由があって、
その招きを断りました。
中には、遣わされてきたしもべを殺した人もいました。
そこで、王は怒り、兵隊を出して、その人殺しをした人々を滅ぼし、
彼らの町を焼き払いました。
そして、大通りに行って、出会った者をみな宴会に招きなさいと言いました。

王が開いた結婚の披露宴だったのに、先に招待された人々は、なぜそこに行かなかったのでしょうか。
その人々には、王が開いた結婚の披露宴より、もっと大事なものがあったからです。
普段の生活で自分たちが持っていた物や、いまの立場が、王が準備した披露宴より、もっと価値があって、
大切だと思ったのでした。

聖書を見てみましょう（ルカの福音書には、もう少し詳しく出ているので、いっしょに見ましょう）
マタイ 22:5

ところが、彼らは気にもかけず、ある者は畑に、別の者は商売に出て行き、

ルカ 14:18-20

18 ところが、みな同じように断わり始めた。最初の人はこう言った。『畑を買ったので、どうしても見に出かけなければなりません。すみませんが、お断わりさせていただきます。』
19 もうひとりはこう言った。『五くびきの牛を買ったので、それをためしに行くところです。すみませんが、お断わりさせていただきます。』
20 また、別の人はこう言った。『結婚したので、行くことができません。』

このように、「普段の生活」、その中で「持っていること」、「努力して成し遂げたこと」･･･つまり、
すべて「私」ゆえに、それを下ろすことが簡単ではなかったのです。

イエス様は、このたとえを、神殿（宮）で、大祭司やパリサイ人、ユダヤ人に向かって言われました。
この人々が、イエス・キリストと天国の福音のために先に召された者たちでしたが、
しかし、選民思想、まちがったメシヤ思想、律法主義や宗教的な熱心さによって、
天国を抱いてこの地に下ってこられたイエス様をメシヤ（キリスト）として見ることができないことを
話されたのです。
ですから、先に召された者たちであったその人々から見ると、赦されることができない罪人だと思えた人々が
宴会の座に招かれるようになったのです。
ルカ 14:21
しもべは帰って、このことを主人に報告した。すると、おこった主人は、そのしもべに言った。『急いで町の
大通りや路地に出て行って、貧しい者や、からだの不自由な者や、盲人や、足のなえた者たちをここに連れて
来なさい。』

それが、私たちのことです。

ルカ 14:23 も見ましょう。
主人は言った。『街道や垣根のところに出かけて行って、この家がいっぱいになるように、無理にでも人々を
連れて来なさい。
このように、強制的に、無理にでも連れて来られました。これが「不可抗力的な神様の恵み」です。

王の強制的な召しによって、王子の結婚の披露宴に参加できるようになったのです。
神様の教会である私たちは、みんな、この地で最後の日に、新しい天と新しい地で
王であるイエス様の花嫁として、主人公として、その披露宴に参加するようになります。

2 税金の話 （マタイ 22:15-22）

パリサイ人が、イエス様をことばのわなにかけようと、自分たちの弟子を送って質問させました。
17節「税金をカイザルに納めることは、律法にかなっていることでしょうか。かなっていないことでしょうか。」
と尋ねました。

イエス様の答えを 19節から 21節で見ましょう
19「納め金にするお金をわたしに見せなさい。」そこで彼らは、デナリを一枚イエスのもとに持って来た。
20 そこで彼らに言われた。「これは、だれの肖像ですか。だれの銘ですか。」
21 彼らは、「カイザルのです」と言った。そこで、イエスは言われた。「それなら、カイザルのものはカイザル
に返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」

ルカの福音書20:22-25でも同じ場面ですが、
イエス様は最初から、「デナリ銀貨をわたしに見せなさい。これはだれの肖像ですか。だれの銘ですか。」と言われています。彼らは、「カイザルのです」と言います。そこで、イエス様は「では、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」と言われます。

イエス様の「それなら、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」ということばは、「あなたがたは、税金を払わないのではなく、正しく払って、また、献金も正しくしなさい」という意味ではありません。
私たちの持っているすべてのものは、神様のものです。私のいのちも、すべてが神様のものです。
神様にささげたものが神様のもので、ささげていないのは私のものでしょうか。
そうではありません。
神様はこの宇宙、万物の主人です。カイザルも神様のものです。
ローマ13:1を見ましょう。
人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、
神によって立てられたものです。

いま、パリサイ人の弟子たちは、神様を信じていると言いながらも、自分たちが世に属している者だと言っているのと同じです。

いま、イエス様が話をされている場所は神殿です。
神殿では、ユダヤ人だけに通用するお金を使わなければなりません。
それゆえ、神殿の中で、自分のお金をユダヤ人だけに通用するお金に換える場所がありました。
デナリは、ローマの銀貨です。
彼らが、イエス様のことばに応じて、すぐにデナリ銀貨を出すことができたのは、
彼らが、いつでもカイザルに服従する準備ができている、カイザルに属する者だということを意味します。
いま、イスラエルはローマの属国です。
ローマの皇帝であるカイザルに統治されていたのです。

いまもたくさんの人々は、カイザルに代表される「この世の力」「富」
「権力」を神々だと思って生きています。
この世に属する者たちです。
この世の神、支配者はだれでしょうか。サタン（悪魔）です。
Ⅱコリント4:4
その場合、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。
ヨハネ16:11
さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。

事実は、パリサイ人の弟子たちの質問自体がまちがいです。
私たちがこの地で、なにかする、しないかによって、神様のものある、神様のものでない、と区分されるのではありません。

私たちは、イエス様の十字架の恵みによって、
「神様の子ども」となり、「神様の所有された民」となりました。

Ⅰペテロ 2:9

しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。

神様の所有とされた私たちは、
「神様を見あげる者」
「神様の恵みによって神様のものになったことを感謝する者」
「神様の恵みでなければ生きることができないと告白する者」として生きればよいのです。

3 復活に関する論争（マタイ 22:23-33）

サドカイ人とイエス様が話をするところです。内容は聖書を読んで、黙想しましょう。
その中から、29節と 32節を見ます。

マタイ 22:29、32

29 しかし、イエスは彼らに答えて言われた。「そんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからです。

32 『わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあります。神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。」

サドカイ人たちは、復活自体を信じず拒否している者です。聖書も神の力も知らない者だということです。
その人々の質問もまちがっていました。復活というのは、私たちが願って求めている姿でよみがえるのではありません。
32節で「アブラハム、イサク、ヤコブ」は、旧約聖書に出て来る死んだ者です。しかし、イエス様は「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」だと言われます。そして、「神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。」と言われます。
これは、「アブラハム、イサク、ヤコブ」は死んだけれども、いま生きている者だということです。

4 第一の戒め（マタイ 22:34-40/ルカ 10:25-28）

これは、ルカの福音書10:25-28 も見てください。
イエス様は、いちばん大切な戒めは、「神様を愛し、隣人を愛しなさい」ということだと言われます。
そのとき、ルカの福音書を見ると、
律法の専門家が「では隣人とはだれですか」（私は愛します！）と言います。
そのとき、善きサマリヤ人の話を言われます。

この話は、神様を愛し、隣人を愛することは、私がすることではなく、
神様を愛し、隣人を愛された方は、イエス・キリストだということです。
イエス様は、父なる神様を愛して、十字架で死ぬまで従順にされた方です。
そして、強盗にあって死んだ私たちを生き返らせてくださった方です。
私たちが、自分ががんばって「神様を愛します。隣人を愛します！」というのではなく、
その愛を先に行ってくださったイエス・キリストが、聖霊で私たちの内に来てくださって、
私たちを愛する者として造り上げてくださるのです。

5 ダビデの子（マタイ 22:41-46）

イエス様より先にいたダビデですが、聖書を見ると、ダビデがイエス様のことを
主と呼んでいます。
つまり、イエス様がダビデより先におられたということです。
黙示録ではイエス様のことを「アルファであり、オメガである」
「最初であり、最後である」と言っています。
イエス様は神様です。
ですから、論争が成り立つはずがありません。

学院福音化のみことばを、ひとつのメッセージとして聞いて終わることがないように願います。
書いてある聖書箇所全体を見て黙想しましょう。
よく分からなくて、理解できないと思ったら、神様に「悟ることができる恵みをください」と求めましょう。
すぐに分からなくても、理解できなくてもだいじょうぶです。
みなさんの中におられる真理の霊である、聖霊なる神様は、時にかなって必ず悟ることができる恵みを与えてくださいます。